

武士道の成立についての思想史的考察

赤羽根 龍 夫

一

日本思想史を理解する上で、武士道とは何かという問いを避けて通ることは出来ない。それを今なお日本人の道徳のもとにあるものと高く評価するにしても、また敗戦にいたる近代日本を誤らせた元凶であり、もはや全く過去の遺物であると否定するにしても、鎌倉幕府以来七〇〇年の間日本人の考え方の中心にあった思想であることは確かなのであるから、我々日本人が二十一世紀を生きる道を探るためにも、武士道とは過去の日本人にとって何であったのかと尋ねることは欠かすことの出来ない問いである。

武士道が成立した源流を尋ねてみると、上代、武勇をもって大和朝廷に仕えた物部・大伴氏に代表される「武勇たけきもののふの道」が最初にあげられる。第二次大戦中歌われた「海行かば水漬しなく屍しかばね 山行かば草むす屍おこきみ 大皇の辺にこそ死なめ 顧かえりみはせじ」の万葉歌は、武門である大伴氏が天皇に忠誠を誓った言立ことだてである。しかしこの「もののふの道」を武士道そのものとすることは出来ない。それは律令制を守護する官人の道である。私は今日にいたるまで、個々の思想ではなく、社会的理念として歴史的形式をとった自立した思想は、律令制と武士道の二つだけだと考えている。今日の民主主義という考え方は、日本においては未だ個々人の恣意的な発想を抜けておらず、ヨーロッパのように、社会的理念として歴史的形

態をとった自立した思想にはなっていないと考えている。

奈良時代に確立した律令制度のもとにあるのは、聖徳太子の「十七条の憲法」とその制度化である「冠位十二階の制」である。大和朝廷が四世紀の半ば日本を統一したと言っても、大伴氏・蘇我氏・物部氏などの大豪族が実権をもって互いに争っており、普遍的理念を持った統一国家ではなかった。朝廷はいわば個々の豪族の恣意的欲望のぶつかり合いの場であったといえる。蘇我氏の一員として個的欲望の争いの渦中に生きた聖徳太子は、和の思想をもとにして一つの理念を築いたのである。和の思想は、せまい国土の中で、中国大陸の王朝のように負けても捲土重来けんどちゆうらいを期して亡命できず、争った相手と一緒に生活しなければならない日本の風土と、湿润で、自然と人間との対立を産まない清くさやけき自然環境の中から生まれた日本の感性を、儒教や仏教の思想をもとにして理念化したものであると私は思っている。聖徳太子はその和の思想をもとに、豪族の個的恣意を押えて、天皇中心の中央集権国家と豪族から庶民にいたるまでの身分制度を確立しようとしたのである。太子の理想は大化の改新をへて、律令制度として確立した。ここに個的恣意を否定し普遍的理念を体现した思想が日本の歴史の中で初めて生まれたのである。もちろん、奈良時代、平安時代を通して、普遍的理念としての律令制が理想的に実現した時期は一度もなかったが、奈良時代は、ともかく律令の実現を求めたし、平安時代中期以降

は、莊園制という再び生まれた貴族の個的欲望によって律令制は崩れたが、莊園制も立前としては律令制の下にあった。後三条天皇の莊園整理令は律令制の立て直しの試みであったが、個的恣意は天皇制の内部にまでひろがり、院政によって律令制は崩壊するのである。哲学的に言うならば、普遍的理念を歴史的に実現しようとした時代が崩れ去って、再び個々人の恣意的欲望がバラバラに対立する時代——それを乱世という——が到来したのである。

二

律令制を守る官人の上代もののふの道と系譜を異にする武士道発生のもう一つの源は、東国に自然発生的に生まれた東国武士達の「兵（つわもの）の道」である。東国は北に蝦夷の国と接し、古来から柵が設けられており、常に戦時体制であったので、自分の土地は自分で守らねばならず、自ずと勇者を尊ぶ風土となっていた。後に「平家物語」には東国武士について、「そのいくさというのは、親も討たれよ、子も討たれよ、死ねばこれ乗り越えたたかう。これが東国武者である」とその勇猛ぶりが描写されている。また戦において大切なことは勇敢であると同時に、味方を裏切ったり卑怯な振舞いをしないことであるから、野蛮とも言える戦闘行為はまた、武士的倫理の生まれる土壌でもあった。『源氏物語』の中の「宇治十帖」ではそれを「東国には二心がない」と表現している。こうして東国の純朴で勇猛な風土の中から、潔さと卑怯でないということを核とした兵（つわもの）の道が生まれたのである。そしてそれが貴種流離譚の英雄とも言うべき源義家の品位と結びついた時、つまり上代もののふの道と中古の兵の道が、前九年の役・後三年の役で東国の乱を平定し、手柄のあった部下たちに自らの土地を分け与え、武家の棟梁と言われるようにな

る源義家の人格を通して結びついた時、武士道は歴史的形態の中に自らを実現する（つまり個と普遍が統一される）道を開いたのである。後に頼朝が挙兵した時、石橋山で敗戦を喫したのは三浦一族が畠山重忠と戦って参戦できなかったことが一因であった。負けた畠山が報復のために三浦の衣笠城におしよせ三浦党は敗走しなければならなくなった時、八十九歳の三浦大介は共に逃げようという子供たちに次のように言う。

源氏累代の家人とし、自分は今、貴種再興の時期に際会して、こんなうれしいことはない。自分は齡すでに八十余である。余命いくばくもない。今この老命を頼朝公にささげて、子孫の勲功を助けようと思う。お前らは急いでここを立ち去り、主君の行方をたずね、これに奉公せよ。自分はひとり城郭に残り留り、大軍がいるように見せかけて、敵軍を引きつけようと思う。

三浦大介はこう言って一族を落ちのびさせ、自分は城を枕に壮烈な死をとげたのである。源氏を棟梁とする東国武士団は、このように御恩と奉公を核に固い団結で結ばれていたのである。それは平家が一門の繁栄しか心になけなかった為に個々バラバラな恣意と欲望によって滅びざるを得なかったのと異なると、後の家康と三河武士団の関係と同じように、その特殊形態（御家人制度）を普遍化して、鎌倉武士道という、社会理念として歴史的形態をとった思想を築くことが出来たのである。

しかし頼朝は武士道という普遍的理念の真の体现者にはなり得なかった。義経や範頼などの肉親を殺し、重代の御家人の多くを謀殺している彼には天下人の徳はなく、やはり個の英雄というべきであって、彼と御家人を結びつけたものは、源義家以来の源氏の血統でしかなかった。頼朝の猜疑心と血族への冷たさという個的性格のため源氏は三代で滅ぶのである。

さらに東国にうまれた武士道を真に普遍的な社会理念とするためには、京都の朝廷に対して慎重であり過ぎた朝頼では不十分であった。後鳥羽上皇の北条義時追討令に対し、むしろ正義は我にありとして追討軍をけちらし、天皇を廃位させ三上皇を島流しにすることによって、義時・泰時親子は律令制を廃して東国武士道を普遍的原理として確立したのである。律令制から武士道への移行は、北条氏によってなされたと言うべきである。後の南北朝に、南朝の天皇の正統性を主張した北畠親房さえもが北条泰時を次のように評価している。

泰時は徳政をしき、法律をかたくし、己れの分というものをよく自覚していたのみならず、一族ならびにあらゆる武士をもいましめて、決しておごらせることがなかった。だから七代までも天下を保ったのは、ひとえにその徳というべきである。

ここで「法律をかたくし」と言っているのは泰時が定めた「関東御成敗式目」、いわゆる貞永式目のことである。貞永式目によって鎌倉武士道が法体系として普遍化したのである。しかしここでは既に戦時のモラルではなく、日常生活を規制する倫理が定められている。特に、悪口や人をなぐることを禁じ、嘘言・ざん訴・姦通も禁止され、守られない時は流罪や所領の没収という厳罰をもって罰せられた。また勇氣や卑怯な振舞いをしないという戦場のモラルは、日常の生活の場では儉約と質素を尊ぶという消極的なものに変えられた。そしてかわって求められたのが、儒教や仏教による人生哲学や教訓なのである。

武士道に儒教や仏教にもとづく教訓性が強まってき、もろもろの芸能による教養が求められるようになるのも、一ことで言って、武士道がもはや単なる即自的インジビな生活倫理ではなくて、自覚的コンアジビな規範倫理化されてき

たことによっている。後世、武士道として理解されているところの道徳主義的ないし道学主義的教条倫理というのは、大体において、北条武士道として方向を転じたものを、いっそう形式的にととのえたものにはかならないのである（『武士道の歴史』一卷）

三

ある文明や政治形態が減じる原因は、その文明や政治形態を成立させている原理そのものにあるというのが私の考えである。哲学的に言うならば、終わりに現われる矛盾は、始まりそのものうちにあるということである。鎌倉幕府崩壊の原因は、土地を仲介とする御恩と奉公によって成り立つ主従関係という鎌倉武士道そのものにあった。元寇の役に戦った御家人に、戦った相手は蒙古であるゆえに、分け与える土地のないことを直接の原因とし、さらに、鎌倉武士道が教養として求めた仏教が、主従関係を超えた普遍的な絶対者（神）がいることを教え、絶対的なものの前での個（自己）の意識を自覚することによって、幕府という権威を認めなくなったのである。熊谷次郎直実をはじめとして多くの御家人が法然の浄土宗を、「弥陀は念仏する者を惡道におとさず迎えとってくださいから、念仏は一人当千のつわものにまさる」という、大勇を全うする道として信仰した。鎌倉武士の、死を前にしての心の支えとなった仏教は、幕府崩壊のもう一つの原因となった個の意識を生み出したのである。そしてこの個の意識が、次の室町時代の原理とされるのである。

バラバラになった個は、最初は後醍醐天皇を新たな普遍としておし立てようとした。そのために楠正成のような忠臣も出たし、北畠親房のように南朝天皇の正統性を主張する考えも生まれた。しかし、個として自らを自覚した武士達の欲望は新しい権威を認めることは出来なかったし、一方、

護良親王や北畠顯家のような皇族や公家も自分たちの普遍者としての原理を破る、武將という個的な姿をとって現れた。反対に個をむき出しにした足利尊氏のような武將も未だ新しい天皇を普遍として立てずには戦うことが出来なかった。しかし、もはや普遍は大義名分としての役割しか果たせず、次の時代の原理は、バラバラになった個がぶつかり合うことではなかった。

私には楠正成も大戦中のイデオロギーが祭りあげたような忠臣などではなく、個の英雄であつたと思われる。御家人ではなく、大和土豪の一人であつた正成は「鎌倉武士の強さは、ただ武力一点張りて敵を破るだけの強さだ。智謀を以てたかえば、こういう強さはかえって欺きやすく、すこしも恐るるに足らない」と自ら語っているように、欺くことを戦略の第一と考える新しい時代の武士であつた。そこには卑怯な振舞いはしないことを原理とする鎌倉武士道はないと言わなければならない。尊氏と正成の戦いは、天皇を大義名分としてかかげた、個と個との欲望の争いだったのである。決して二人を貶しめて言うのではなく、それがこの時代の原理というものである。そしてその大義名分としての普遍は、個がむき出しになるに従つて、取り除かれる運命にあつたのである。南北朝を統一した足利義満も守護大名をおさえる力はなかったし、五代將軍義政以降は、將軍といえども、仏教や、茶の湯・能楽などの遊芸に、不安な心を慰める個人にしかすぎなかった。

こうして応仁の乱以後は、個的欲望の時代をむかえるのであり、個的欲望がむき出しになった必然の結果として生まれたのが、下剋上という原理なのである。

従つて室町時代とその末期の戦国時代には、一般的な規範として時代精神となるような武士道はなかった。勿論、個々それぞれには優れた武士は

数多くいた。しかし時代の原理としては、槍一本で自分のむき出しの欲望を実現しようとする下剋上の時代であつた。そしてすこしでも安定を獲得することが出来た個人や集団は、家訓や分国法を作つて集団内だけの平安を維持しようとした。新しい時代を築く人物は、必ず自らの生きた古い時代の中に次の時代の原理となる芽を見出し、それを育てていくものである。次の時代は、個の時代にせめて小さな安定を望んだ「家」というものに眼をつけた家康が築き上げていくことになるであろう。

しかしこの時代の原理はやはり個であつた。そしてこの時代を終わらせるのが、けたはずれた個性の持ち主であつた織田信長なのであつた。しかし個は、どんなにすぐれた個であり、時の抽象的普遍（室町幕府）を滅ぼす力があつても、個と普遍を結びつける歴史形態をとり得ず、個として滅び去る運命にあるのである。信長は、死ぬ十年前、昇天の勢いにあつた時、毛利の智將・安国寺恵瓊^{えけい}によつて「信長は遠からず高ころびにあおのけに転落するだろう」と予言されていた。この時代の原理であつた個人の才覚をたよりに「天下布武」（武力によつて天下をとる）を旗印として欲望のままに時代を先がけた個の英雄は、明智光秀という小さな個人の欲望（体面）によつて滅ぼされてしまうのである。

織田信長と同じように秀吉もまた個の英雄であつた。足輕の子供から身を立てていつた秀吉は信長以上に、個以外の原理を持たなかつた。そして関白になり個の時代の頂点にのし上がった時、その我^がをそこでおさめる原理を持つことが出来ず、朝鮮出兵という暴挙に出て行かざるを得なかつたし、晩年の子秀頼への妄執は、淀君と石田三成の小さな我^がを許してしまつた。我^がの主張は、どんなにつよい我でも、我と我がぶつかればどちらかの我が倒れざるを得ず、一方が倒れても又新しい我が生まれ、争いは永遠に続くことになる。

四

戦国の世に、その後三〇〇年近くも続く世界史上まれにみる平和な世を築いた家康と、信長や秀吉などの戦国武将とのちがいは、家康は個の英雄ではなかったことである。秀吉の前で家康、毛利輝元、宇喜多秀家などの大名が家宝の自慢ばなしをしていた時、家康は次のように言ったという。

それがしはご承知のとおり、三河国の片田舎者なので、これといった珍しい書画・調度品のたぐいは何のたくわえもない。ただそれがしのためには水火の中に入って一命を捨てるのも惜しまない者が五百騎ばかりはいる。これこそ、この家康にとっては第一の宝だと存じている。

(『徳川実紀』)

この言葉のように家康は個の時代に、自らの才覚だけでなく、「何よりも譜代の三河家臣団を大切にした。それはおそらく家康が小さい時から人質になっていたために、かえって国元の家臣達と心で結ばれていたためである。家康は個の時代に、他の武将のように個的欲望を押し通していつて天下をとることを目指さず、古い鎌倉武士的な主従関係をもって、ただ三河の家臣団の幸福を考えていたのである。その古さが彼の新しさであったのである。家康の最大の危機は、後の武田信玄との三方ヶ原の戦いや関ヶ原の戦いではなく、今川の人質となっていた家康が岡崎の城に帰ってから三年目の城下近くにおこった一向一揆の折であった。譜代の家臣の半分以上が一揆の味方について城の近くまで攻め寄せて来た。これは武力と慈悲において優れた主君と一命を捨てて奉公して来た家臣団という古い主従関係と、一向一揆としてまとまった庶民の新しい個的意識との戦い——原理と

原理との争いであった。しかし若い家康が気がなくなって最前線に飛び出してくると、一揆に味方した家臣達は、どうしても刃向い出来ないという気持ちになり、また次の機会にしようと引き揚げてしまふのである。

こうしたことが何度か繰り返された後で、有勢であった一揆方の武士の方から降服してしまったのである。古い伝統的な主従関係の勝利であり、私はこの時代に日本がヨーロッパの個的意識が成長しなかったのは、秀吉や家康が個的意識を力で押さえたことが全ての原因ではなく、日本の風土におけるその湿潤な人間関係が根本にあると思うのである。家康はその後、武田や信長や秀吉との間で長年、面従腹背を続けながら、彼らの家来たちをも、自らの血縁的な主従関係の中にとり込んでいったのである。そして彼はその三河以来の主従関係を普遍的なものとして、全国的な組織にまで拡大していったのである。こうして室町時代の大名領国制と、鎌倉時代の御家人的主従関係を統合した時、江戸時代の幕藩体制は成立したのである。古きを求めるといことが新しい時代創造のエネルギーとなるとい歴史の論理を、家康は見事にわれわれの眼の前に示している。

家康の幕藩体制は、三河以来の伝統的な主従関係をもとにして、その上に秀吉の刀狩りによる身分制度と検地による石高制をとり入れることによって成り立っている。しかし、信長や秀吉があくまで力による支配を遂行しようとしたのに対し、家康は、「馬上をもって天下を得るも馬上をもって天下を治めることはできない」の理念のもと、信長の「天下布武」に対し、「元和偃武」(偃武とは武器を伏せて用いぬという意味)をかかげ、乱世を治めるには学問によるとして、秀吉が朝鮮出兵に自らの個的欲望をまる出しにしていた時期に、藤原惺窩(せいか)を招いて意見を述べさせている。士・農・工・商という身分制度の思想的な根拠づけとして儒学を用いようとしたのである。武力はいくら強力になっても個的なものとどまり、学問

こそが個の否定であり、普遍的原理を確立する道であるという発想であった。そうした家康の理念は慶長二十年の「武家諸法度」として実を結ぶのである。その第一条には「文武両道」が定められており、それが幕藩体制の基本原則とされた。

文武弓馬の道、専ら相嗜むべき事

文を左にし武を右にするは、古の法なり。兼ね備えざるべからず。弓馬は是れ武家の要枢なり。兵（武器）を号して凶器となす。已むを得ずして之を用う。治にいて乱を忘れず。何ぞ修鍊を励まざらんや。

こうして儒教によって身分制度を確立し、その精神にのっとりて参勤交代を定め、城の修理や結婚を届け出によると定め、徒党を組むことや、喧嘩やぜいたくを禁じることを「武家諸法度」として法制化し、將軍が代わるごとに大名小名を江戸城に登場させて読みあげることを定めとしたのであるが、次の問題は、身分制度の最高の位置におかれた武士を、いかにしてその立場にふさわしい人間に仕上げるかということであった。制度を支えるのが人間であるとなると、ある意味では身分制度の確立よりも、昨日までは、下剋上の乱世に個の欲望のままに武力をたよりに生きてきた武士たちに、秩序を守って生きる新しい道徳を与えることの方が、はるかに難しいことであった。この武士たちの新しい道徳——江戸時代の武士道を、文武両道思想をもとに家康は実に巧妙に確立したのである。そしてその為に大きな役割を果たしたのが、徳川家の御家流となった柳生新陰流の柳生宗矩であったのである。

江戸時代の武士の理想とされた「無我」とか劍禅一致、または武道による人格形成ということも、元来は上泉伊勢守にはじまり柳生宗矩・十兵衛父子によって確立した柳生新陰流（江戸柳生）の理想としたものなのである。日本の武道の歴史の中で剣をただ人を殺す道具ではなく、人間形成の

道とした最初の、しかも卓越した人物は上泉伊勢守であった。彼によって始めて剣と人格ということが結びついたと言ってもよい。彼は戦乱の世にあつて殺人刀にとどまらない活人剣を求めた。そして究極的には「無刀」ということを理想とした。それは剣は人を殺すものという常識からすれば一八〇度の発想の転換である。『武芸小伝』にある話であるが子供を人質に民家にたてこもった賊を、その場で頭をまるめて坊主姿になって救い出した時、彼は現場に居合わせた僧から「剣刃上の一句を悟る人なり」（生死の敵頭に立ってたじろがぬ心を持った人である）と称讃されたという話は、彼の剣の理想というものをよく物語っている。上泉伊勢守には禅や儒教に裏付けられた、人間の心への深い洞察がある。そのことによって彼は塚原卜伝の、相手の心を幻惑させて勝つ一ノ太刀を超えたのである。

上泉伊勢守以来、新陰流は単なる捨身ではなく「心の下作り」を十分に積んで、「磐の下に敷かれても滅しない心」をもった隙のない、しかもゆったりとした心の自在さを極意とするようになるのである。

彼の出した無刀の公案を解いたのが柳生石舟斎（宗厳）であり、石舟斎はそれによって柳生新陰流を名乗ることが許されたが、石舟斎はまた儒教的な教養人でもあった。彼の道歌には次のようなものがある。

兵法の極意に仁義礼智信、たえずたしなみ氣遣をせよ

つねづねに五常の心なき人に、家法の兵法印可ゆるすな

こうして新陰流は草創期にすでに禅的精神と儒教的精神に裏付けられた活人剣と無刀を理想とする志深い剣道であったために、儒教倫理による文治政策を理想とした家康に認められて徳川將軍家の御家流となっていくのである。そして柳生流の精神を実際の政治の中で生かし、さらには幕藩体制に合うように改良し、天下の御指南役となったのは、石舟斎の子で江戸柳生の祖である柳生宗矩なのである。私は江戸時代の武士道の研究には宗矩

・十兵衛父子から始まる江戸柳生の解明がぜひとも必要であると思っている。しかし江戸柳生は幕藩体制が確立した家光以降、江戸城の中に深く隠されてしまったので、現代に至るまでほとんど解明されていないのが現状である。

新陰流も、もともとは「太刀のびかりとする所へ、初一念を直ぐに打ち込む」先々の勝の相打ち主義が本来の教えであるという捉え方もあるが、私は新陰流はもともと表裏と待ちを基本としていると考えている。宗矩が「わが心ばかりにて打つことを当流にはひが事と相きわめ候事」というように、がむしゃらに打っていくのではなく、「心の下作り」をして、相手を見極めることが新陰流の本来なのである。家康は二代將軍秀忠に向かって「小野流（一刀流）は劍術なれども柳生流は兵法なり。大將軍たるものは須らく大將軍の兵法を学ばれよ」と言ったといわれている。新陰流が家康に好まれたのも、それが家康の兵法——待ちを根本とし、計略を仕掛けて相手のくずれを誘って出来るだけすくない犠牲で勝利を収める——と通じるものを持っていたからなのである。二四歳から家康の旗下にあった宗矩は、柳生の劍の理想が家康の政治の中に実現されていくのを眼のあたりにみて、今度は家康の理想を柳生の劍の型として体現しようとしたのだと思う。あるいはそれは家康の命令であつたかも知れない。徳川家安泰の礎を築いたとしても、子孫が必ずしも立派な將軍になるとは限らない。又、家康の考え方が三代四代と続くうちに忘れられてしまうかもしれない。そこで柳生流の型の中に家康の思想を込め、柳生流を学べば家康の思想が体得できるようにしたのである。三代將軍家光が「天下の務（政治）宗矩に学びてこそ其大体を得つれ」と言ったといわれることもそうした意味で捉えるべきものである。

徳川幕府が柳生宗矩と同じ將軍家師範である小野忠明に六百石しか与え

なかったのは、二代將軍秀忠が小野次郎右衛門忠明に劍術について尋ねた時、「兵法は刀を抜いてからでないと論にはなりません。畳の上の兵法は畠の水練と同じことでしょう」と答えて不興をかったためであるとか、稽古に刃引を用いて、將軍といえども遠慮なく打ちすえたために將軍の覚えが悪かったためではないのである。幕府が一刀流を一般の武士の武道としたためなのである。一般の武士は主君の命じるままに、戦の場では捨身になって敵に切り込んでいけばよいのであり、また日常の勤務においても主君の命令には絶対に従い、時には言われるままに従容として腹を切ることが武士道であると、幕府によって定められたのである。武士道の本質については諸説あり、和辻哲郎のように鎌倉時代に「つわもの道」という倫理思想として自覚をもたれた主君と家来との間の主従のモラルで、その内容は献身の道德による「利己主義の克服、無我の実現」と捉える説もあるが、家永三郎はその反対に、主君に対する家来の奉公は、主君が与えるであろう恩賞を期待してなされた利己的な行為であると主張する。これを理想主義と現実主義との対立とみるよりも、私は武士道というものはその両者を含んだものが真実の姿であると考えている。和辻のいう「無我の実現」ということは江戸時代の武士道の理想であって、鎌倉時代・足利時代には未だ現れてはいない。たしかに「無我」という発想は鎌倉時代の禅宗の中に現れている。しかしそれは觀念のうちでのことであって一般武士の行動の規準とはなり得ていないのである。そのかわりに「名を残す」とか「名誉」ということがその時代の理想であった。「源平盛衰記」や「太平記」には生命よりも名誉を重んじる武士達の、我々の心を深く感動させる出来事が描かれている。たしかにそこに日本的な武士道の一つの源がある。しかし彼らの、名誉を重んじた美しい行為が日本の武士道に独特なものであると思うのは早計である。西洋の騎士道にとどまらず、どこの国の

古代英雄詩の中にも同じような話はみられるのである。おそらくそれは日本の武士道の独自性ではなく、人間そのものの独自性なのである。

しかし武士達は名譽を重んじると同時に、領土や財産や恩賞のために働いたこともまぎれもない事実である。そしてその両面をうまく結びつけたものが、江戸時代による「家」という制度である。主君の命ずるままに腹を切ったのは、元来はそのことによって「家」が存続するという保証が切ったことである。「家」は単に個人の名譽の基盤でもなければ、また単なる家族の生活基盤でもなく、その両者が忽然と一体となったものなのである。

そのためには言われるままに腹を切っても守らなければならない家名というものと、本人が腹を切っても家は存続させるという生活の保証を基盤として江戸時代の武士道は成立している。武士道の鏡とされた「葉隠」も、何をしてもし結局腹を切れば人々に称讃され、家名は存続するのだという打算がその行動の裏にあるように私には思えてならない。そこには自己の行為に対して真に責任を取るということがないのである。したがって江戸時代の武士道にも、もともとは和辻哲郎の言うような「無我の実現」ということはあり得ないのである。たしかに江戸時代の武士達は、儒教倫理と禅思想とを取り入れて「無我の実現」ということを武士道の理想とした。そのために一刀流の「捨身」——生を捨てることによってかえって生を得る、ということが武士のあるべき姿とされ、「剣道の目的は武士道を明かにするにあり」と言われるように、剣道は武士の表芸となり、武士的人格形成の手段となったのである。しかしそれは本当に自立した思想として武士達が見出したものではなく、幕府に都合のよいように上から作られたものである。「捨身」と「無我」を原理とする江戸時代の武士道は、あたかも自分たちの作り出した自立した思想であるかのように幕府

によって思わされてしまったものであるというのが私の主張である。和辻哲郎や鈴木大拙のような思想家ですら、それが真の武士道であるかのよう

に思い込まされているとしたら、我々日本人は未だ徳川幕府によってかけられた催眠から覚めていないことになる。

日本人は剣を両手で持つ。防禦の用意をしない。片手をあけておいて、それで自分を防ぐということはしない。ただ向こうを斬るだけである。何事も考えないで、この身を棄てて、ある意味では、向こう見ずに、やたらに前方へ前方へと飛び込む。……日本人の性格というもの

は、単刀直入に全身と全心とで突き込み、斬り込むというところにあると見てよからうと信ずる。この日本人の性格が、やがてまた禅の真髓である。(鈴木大拙)

しかし真の劍禅一致とは、向こう見ずに前へと飛び込むことではない。禅とは真に自分で考え行動する自立した人間になることなのである。鈴木大拙の禅の理解は、よく言われるように多分に浄土真宗的、他力的であると言わなければならない。私は「無我」とか「捨身」ということは武士道の一つの側面をしか捉えていないと思っている。それは江戸時代の一般武士の武士道ではない。武士道には、心への深い洞察を伴い自ら考え決断する真に自立した人間の武士道というもう一つの側面が本来なければならなかったのであるが、それを自覚させることは幕府の存立を危くするものであるから、幕藩体制の確立過程の中で、故意に隠されてしまったものである。そして武士道の自ら決断する自立的な側面は、將軍とその補佐役としての幕閣にのみ体现されるのである。そして彼らの習うべき剣道は柳生新陰流と決められたのである。江戸柳生の初代柳生宗矩が一万二千石の大名となったのは、単に宗矩が家康・秀忠・家光の三代將軍に重んじ

られたためではなく、將軍の学ぶべき王者の剣を教えるものは自身も又大名でなければならぬとされたためなのである。三代將軍以降、江戸柳生は、將軍とのお相手役としての側近および若年寄以上の大名とその相手役としての江戸家老のみしか原則として学ぶことは出来ないようになったのである。しかし江戸時代の唯一自立した思想としての將軍の武士道も、封建的身分制度の中で支配される者が必要としたので、真に自立した思想とはなり得なかったのである。江戸時代には真の武士道は確立しなかったと言わなければならない。これまでの日本の武士道および武道の研究には、江戸時代における一般武士の武士道と將軍の武士道との区別、一般武士が学ぶべきとされた一刀流と將軍が学ぶべきとされた柳生新陰流との区別について考察がなされていなかったと思われる。そのために武士道ないし日本人の思考方法について多くの誤ちが犯されて来たように思う。日本人とは何か、日本の武士道の独自性とは何かということを考えるためにも江戸初期の幕藩体制の確立期における武士道の成立について改めて解明されなければならない。そしてそれに深くかかわっていたのが柳生宗矩・十兵衛親子なのである。これまでの江戸時代の思想史の研究には柳生新陰流、特に江戸柳生の研究がそっくり抜けてしまっている。しかし江戸柳生は徳川幕府三百年の間、將軍家の御家流として日本の武道の本流であったのであるから、江戸柳生の解明がなければ、日本の思想史の大きな部分が欠落したままにとどまるのである。

こうしてみてみると、武士道も武道も、將軍や上級武士の武士道・武道と一般武士の武士道・武道と二つあることになるのである。われわれが今まで武士道だと思って来たものは、その本当の姿は江戸幕府の政略によって上から与えられたものなのである。もちろん江戸時代の武士達は、いつ切腹を命じられるかもしれないという否定的な立場を、儒教や禅思想によ

って、無我を理想とする武士道という積極的な思想にまで高めはした。しかしそれとても上泉秀綱と柳生石舟斎によって探究され、家康・宗矩の文治政策によってあらかじめ示されていた道なのである。そして江戸時代の武士道が剣道の目的は武士道を明かにするにありとして、その剣道の極意とは「捨身」であり、柳生流の表裏ということは卑怯であると退けた時、実は柳生宗矩の催眠にかけられていたのにすぎなかったのではないだろうか。徳川家康と柳生宗矩こそは日本の歴史の中で最大の心理学者であり催眠術者であったと言わなければならない。

それ以来三百年の太平の世は、無我と捨身を極意とする武士道という催眠状態の中で築かれた。私は決してそう言うことによって江戸時代の人々が催眠にかけられて欺かれていたなどと言うつもりはない。それは家康・宗矩の、太平の世を築こうとした大きな理想の、封建時代というワクの中での実現であったのである。ただ、そのワクが取りはらわれた今日に至るまで、江戸時代の武士道がそれ自体で自足した思想であるという誤解は無くさなければならないのである。江戸時代という時代の催眠は黒船によって覚めされた。しかし無我と捨身の武士道という催眠はその後も続き、家康・宗矩の理想は忘れられて、ただ「心の下作り」のない自分の感情にかすぎないものを、「無我」であるがゆえに絶対の正義であると盲信し、「捨身」になって押し通すことが武士道であると考える過ちを、今日に至るまで繰り返しているのである。私には日本人は催眠にかかりやすい民族であるように思えてならない。我々は未だ真実の自己には目覚めていないのである。

以上のように論じたからといって、私は江戸時代の武士道に多くのすぐれた精神、高潔な人格が生まれたことを否定するものではない。また新渡戸稲造の名著「武士道」に描かれているような高い文化を生みだし

たことを尊いことと思っている。しかしそのような武士道も必ずしも自立的で自由な精神が生み出したものではなく、幕藩体制によって仕組まれたものであったというをはっきり自覚しなければならないのである。江戸時代の武士道には優れた一面と同時に、何も考えずに捨身になることを良しとし、腹を切れば全てが許されるというヒステリックな面があったことも確かである。なぜそうした相反したものが共存したのか。それは武士道が矛盾した構造の上に成り立っていたからなのである。全ての始まりは矛盾が含まれるということが私の考える歴史の論理である。それ故、ある時代が自らの論理を展開していくと、その始めに含まれた矛盾が表に現われ出してその時代を崩壊に導くのである。江戸時代の武士道の思想的基盤となった儒学そのものが、既に身分による社会秩序の維持を唱える朱子学と、知行合一を主張し平等主義的発想を重視する陽明学を含んでいた。江戸時代の武士道への反逆といえる乱をおこした大塩平八郎も陽明学者であったし、明治維新をなした志士たちも陽明学を依り所としたのである。

しかしとも角、江戸時代は儒学をもとにした武士道を普遍的原理として成り立っていたのである。幕府を倒して成立した明治政府は、それならば今度はいかなる普遍的原理を体现しえたのかということが問題になる。江戸幕府を倒すのに最も貢献したはずの西郷隆盛が、十年後になぜ西南の役を起こさなければならなかったのか。彼の最大の悲しみは、明治政府は再び個的欲望の埒端と化してしまったということにあった。彼は新しい儒教的発想で新しい道徳を打ちたてることを信じて維新を行ったのであるが、出来上がったものは政府高官たちの個的欲望まる出しの政府であった。彼は幕府を倒したのであって、武士道を倒したのではなかった。しかし幕府を倒した時、武士道も同時に崩壊したのである。それに気がついた時、彼は自らが倒してしまった武士道に殉じて死ぬしかなかったのである。西郷

の悲劇とはそういうことなのである。それでもなお精神性を重んじる人々は、一方は森鷗外のように和魂洋才でもって古き武士的精神を守ろうとしたし、また、山岡鉄舟のように江戸時代の武士道というワクを超えて武士道を剣の修行を通して普遍的な人間形成の道とした者もいた。しかしそのどちらもが、西欧化の波の中にあって一般的な道とはならず、自由主義が明治の精神を覆ってしまったのである。それは一時、大正デモクラシーという花を咲かせはした。しかし日本では民主主義は普遍的原理としては育たずに、個的欲望を実現するための隠れ蓑として使われたのである。そして人々の心の奥に、捨身と腹を切れば全ては許されるという、江戸時代の抑圧された武士道の一面がグロテスクな姿をとって現われたのである。武士道は第一次大戦から第二次世界大戦の敗戦にいたる間ほど不幸な姿をとったことはなかった。それは一部の軍人のヒステリックな行動を支えただけにとどまらず、日本の国民の全体の極端な行動の言い訳とされたのである。私は、戦争のような抑圧された状況のもとで我々がとりがちな極端でヒステリックな行動は、武士道のみに特徴的なものではなく、湿度の多い日本の風土に固有な特性であると思っているが、人々は敗戦後、それらを全て武士道精神から発生したものとして、武士道の自立的な面もかおり高い精神も全て否定してしまったのである。そして日本人は国をあげてヨーロッパの個人主義にもとづく民主主義を、戦後の日本を支える素晴らしい価値観であるとして、もろ手をあげて受け入れてしまったのである。

その結果姿を現わしたのが、平安時代の末や室町時代の末に律令制や鎌倉武士道の崩壊と共に現われたと同じ乱世である。それは人々が武器をとって争う戦国の乱世ではなく、心の乱世である。現代日本の風潮である能力主義や上昇指向、それに果してなく欲望を満たそうとすることは、特に室町時代の末に現われた下剋上の乱世と全く同じ原理である。子供の頃か

ら知力を武器に一流大学を目先して競争をさせられ、財力によってのみ人の評価がなされる現代の日本に、律令時代に誇り高く生きた官人や、卑怯な振舞いをすまいとして勇敢に生きようとした鎌倉武士や、言いわけをすることを潔しとせず、たとえ貧困にあっても折目正しく生活した江戸時代の武士たちの生き方は失われてしまったと言わなければならない。民主的であると言われることが最良の人格の評価である日本で、そう言うことは勇気のいることであり誤解を招くことであるが、現在の日本に本当の民主主義はないと言わなければならない。

民主主義の源流となった古代ギリシャの民主制においては、人はすべての点で自由であったわけではなく、自由は、ポリス（都市国家）への献身という義務を伴っていたし、ヨーロッパ近代の民主主義には、市民革命の時代をへて、自らの手で作りあげた市民社会を守ろうという使命感があった。つまり民主主義は、普遍的な社会理念として生きているのである。それに反し、現代日本の民主主義は、自らの個的欲望を満足させる手段にしかすぎない。そもそも日本にヨーロッパ的、個人主義に根ざした民主主義が育ちうるかということこそ大きな問題である。私は普遍的な個人主義に根ざした民主主義は、日本の風土の中では不可能であると考えている。狭い国土とヨーロッパの二倍もある高湿度の中で文明を築きあげた日本では、皮膚感覚的に人間が触れ合って生きていかざるを得ないのである。ヨーロッパのカラッとした風土で、他人との距離がとれる広い土地の中でしか本当の個人主義は育たないのである。現在の日本の個人主義は、利己主義でしかない。

しかし民主主義は、今や国の政治的なワクが取り除かれようとしている世界の動きの中で、やはり世界の人々を結びつける大切なきずなである。日本にも本当の民主主義を育てなければならぬとしたら、それは日本の

風土に根ざした民主主義でなければならない。かつて日本という国が生れようとしていた時期に、狭い国土で相争う人々にやすらぎを与えようと、日本の風土の中から導き出した聖徳太子の「和」の思想にこそ民主主義を根づかせなければならないのではないだろうか。そしてそれに封建的身分制を取り去った武士道の気品を加えて、新しい日本の民主主義を築くことが、これからの日本に与えられた課題ではないだろうか。

（参考文献）

- 新渡戸稲造『武士道』昭和十三年、岩波書店
和辻哲郎『武士道』昭和十六年、岩波書店
相良亨『武士道』昭和四十二年、塙書房
奈良本辰也『武士道の系譜』昭和四十六年、中央公論社
山岡鉄舟、勝海舟、勝部貞長『武士道―文武両道の思想』昭和四十六年、角川書店
高橋富雄『武士道の歴史』昭和六十一年、新人物往来社
勝海舟『永川清話』昭和四十年、岩波書店
中村孝也『家康伝』昭和四十年、講談社
新井白石『藩翰譜』昭和四十二年、人物往来社
今村嘉雄『史料柳生新陰流』昭和四十二年、新人物往来社
今村嘉雄『柳生一族―新陰流の系譜』昭和四十六年、新人物往来社
徳永真一郎『柳生宗矩―物語と史跡をたずねて』昭和五十三年、成美堂出版
笹森順造『一刀流極意』昭和六十一年、体育とスポーツ出版社
源了圓『徳川思想小史』昭和四十八年、中央公論社
相良亨『武士の思想』昭和五十九年、ペリカン社
下川潮『剣道の発達』昭和五十九年（初版大正十四年）、第一書房
赤羽根龍夫『剣道の発生についての心理学的考察』昭和六十三年、日本催眠学会機関誌三号
赤羽根龍夫『江戸柳生の思想史的研究』平成二年、湘南短期大学紀要二号